

運動の境界

—南米先住民組織の研究から—

宮地 隆廣

東京外国語大学の宮地隆廣と申します。このたびは身に余る賞を頂くことになりまして、大変感激しております。ジェットロ・アジア経済研究所の皆さま、今回の研究奨励賞の選考委員の先生方、出版の機会をくださいました東京大学出版会の方々、最後に私の研究を支え、指導してくださった皆さま、家族も含めて、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

既にご講評をいただきましたところで内容の説明がございましたが、あらためてこの本の内容についてご紹介し、そこから、この発表のタイトルである「運動の境界」について考えるという形で、自身の経験も少し交えてお話ししたいと思います。

本書は、南米のボリビアとエクアドルという二つの国の先住民運動を扱ったものです。先住民という概念は外から来た人との対比で理解されるものです。ラテンアメリカの文脈では、一四九二年にコロンブスがアメリカ大陸に到来して以来、ヨーロッパから多くの人がアメリカ大陸に入植したことで、もともと住んでいた人が先住民とカテゴライズされるようになりま

アメリカ大陸への入植が始まって既に五〇〇年以上がたちますが、その長い歴史を一言でいうのであれば、それは差別の歴史であるということに尽きるかと思えます。植民地期、アメリカ大陸がヨーロッパの国々の植民地になるに当たって、先住民の人々は、キリスト教を信じていない、あるいはヨーロッパの言葉が分からないということ、文化的な序列としては下に位置する人間として評価されて

きました。そしてそのために、政治的に十分な判断をする能力や、近代的な経済活動を行う能力がないという理由で、さまざまな形で自由を奪われてきたという経緯があります。この差別状況は今日までラテンアメリカ社会に大きな影響を与えているのですが、ここ四〇年ぐらいで政治的な面については非常に大きな変化がありました。まず、一九七〇年代末から、多くのラテ

ンアメリカの国々で民主主義が導入されるようになり、過去に比べれば政治的な権利が広く保障されるようになってきました。また、一九九二年がコロンブスの到来五〇〇周年に当たる年で、それを機にラテンアメリカの歴史を考える、とりわけ先住民を差別した上に成り立ってきたこの社会は何だったの、だろうかということを考える機会が訪れました。さらには、多文化共生や少数民族の尊重といった国際的な規範が確立してきたことから、ラテンアメリカの先住民に対して、ラテンアメリカの外から支援の手が差し伸べられるようになりました。現在あるラテンアメリカの先住民の運動は、差別の歴史を克服して、近年の環境変化を生かした形で、自らのより良い地位を目指す運動であるといえます。先住民運動の研究は非常に多くあります。先住民は、北はメキシコから、南はアルゼンチン、チリまで、二〇を超える国にいます。その研究はおびただしいものがあります。これらの研究に対してひとつの疑問が何人かの研究者から提示されており、私もそれに乗る形で研究を始めたという経緯があります。それは何かというと、い



受賞式 (左が宮地隆廣氏)

担い手として今後可能性があるとする指摘が挙げられます。私自身、この評価自体に反対するものではありません。しかし、もしすべての先住民の運動がこういうものであると理解されるのであれば、そのなかにある多様性はみないままに終わってしまうのではないかとこの違和感を持ったことが今回の研究のきっかけでした。

また、なぜ人間はそういう行動を取ったのかを探る社会科学の分野においても、先住民の研究はたくさんあります。そこでも、おおむねシンプルな行動様式を前提として、先住民の動きを捉える傾向があります。例えば、先住民の運動が政党を作った選挙に参加したとします。なぜそのようなことをしたのかを社会科学では問うわけですが、そのときによく取られる考え方は、次のようなものです。先住民は、われわれと同じ人間である。人間というものは、常に自分の良いもの、得するもののために動き、損することには動かない。先住民もまた、権力や経済的利益など何か

自分のために良いものを強く求めており、それに応じて合理的に計算をして行動するだろう。選挙の機会があるなら、合理的にそれに飛びつくのは先住民でも当然である。このように分析を加えることになります。

ただ、ラテンアメリカに長く住んで、先住民の人々に何らかの形で触れていると、先住民は皆同じだという感覚を持つことはむしろ難しいのではないかと思います。こちらはボリビアとエクアドルの地図です。エクアドルが左上、ボリビアが右下にあります。海岸線に沿ってアンデス山脈が走っていて、その山脈からブラジル側に向けて東側に低い土地が広がっています。アンデスの高地帯は、概ね標高が二五〇〇メートル以上のところですが、雨が少なく、乾燥している、空気が薄い、非常に寒い場所です。一方、低地帯に目を向けると、うっそうとした森が平地にずっと広がっていて、水量の豊かな川があり、雨が年中降る熱帯雨林もあれば、乾燥した熱帯であるサバンナに類する土地もあります。

それぞれの先住民が、異なる自然のなかで自らの文化を育てて

きてきたのであれば、先住民が同じであると考えることがそもそも難しいといえるかと思えます。問題は、数多く研究が発表されているにもかかわらず、同じような先住民のイメージに陥ってしまう以上、先住民の差を描き出すことが意外と簡単ではないということでは、どうやって先住民の差を説得的な形で描くか。ここに私の研究の大きなチャレンジがありました。

その際に私が着目したのが、先住民の組織の政権獲得の行動です。先住民は、先ほど説明したとおり、差別を克服するために運動を起こしています。その運動がアピールや陳情などの典型的な形でなされるのであれば、彼らの望みがかなう可能性は極めて低いといえます。なぜなら、先住民のことを差別している人、社会の主流にある人が政権を支配しており、彼らが差別してきた人の声を簡単に取り上げるとは考え難いからです。このため、先住民運動では、政権をどうやって獲得するか、政権にどうアクセスするかが真剣に議論される場所があります。

今回、ボリビアとエクアドルについて、それぞれ高地と低地にあ

ろいろな先住民の運動を分析しても、結局は同じようなイメージで先住民を描けてしまうというものです。

例えば人類学者を中心とする、いわゆる人文科学の分野の研究では、先住民の運動はおおむね、画一化された近代の消費社会に対抗するものとして評価されるところがあります。持続可能な経済を自然との調和でつくり上げてきた先住民の暮らしを評価する、あるいは、ヨーロッパの文化を持っていないということ、多文化共生の

表 1 先住民組織の政権獲得行動

国	地域	選挙参加	制度外的行動
ボリビア	高地	早い (1978~)	早い (1986~1992)
	低地	遅い (1997~)	実施せず
エクアドル	高地	遅い (1996~)	遅い (1991~2000)
	低地	早い (1988~)	遅い (1991~2000)

(出所) 筆者作成。

今回の発表では踏み込みませんが、ボリビアとエクアドルは、歴史、地理、国際環境とも非常によく似た特徴を持っています。同じような国に

る計四つの組織を取り上げ、政権獲得の行動を整理することをまず私は行いました。民主体制下では、政権を取る唯一の正当な方法は選挙に参加して勝つことです。ただ、そうではない形で政権を取ることでも可能です。例えば、軍のクーデターに参加する、分離独立運動を起こす、あるいは権力の二重化と呼ばれる行動、すなわち国内にある行政や立法の権威を否定して、自らの政府や議会を作る動きを取ることが考えられます。このように、選挙参加とそうでない行動を比べた結果が表のとおりで、四つの組織が全く異なるタイミングで行動を起こしていることがみえてきました。

今回の発表では踏み込みませんが、ボリビアとエクアドルは、歴史、地理、国際環境とも非常によく似た特徴を持っています。同じような国にいて、同じような特徴を持つている運動であれば、同じような行動が観察されるはずですが、しかし、実際にそうならないというところは、この前提のどこかが間違っているということになります。そこで私が考えたのは、各運動の政治に対する考え方が違うから、同じ環境のなかでも異なる行動を取るのではないかとということでした。このように仮説を立てて、私は研究を進めることにしました。

今回、先住民の考え方を捉えるに当たって私が参考にしたのが、本書のタイトルにある構成主義という概念です。構成主義には分野に応じて様々な定義がありますが、私の研究で用いた定義を非常に平たくいうと、次のようなものです。人間というものは、過去から言葉や考え方を引き継いで、それによって複雑な世のなかを自分に理解しやすいように解釈している。その解釈に従って、自分が良いと思いう行動を選択するわけですが、生きていく間にはいろいろな経験をしますから、経験を積むごとに、自分のなかの考え方を改めていく。先ほどいったような、合理的な計算で良いものに飛びつくというシンプルな考え方ではなくて、常に

自分にとって正しいものは何だろうということを考えながら生きていく。これが、構成主義の想定する人間像です。この人間像のことを、学術の用語ではエージェントといいます。われわれ人間なら誰でも行うこのようなことが先住民運動の組織のなかでもなされているであろうということを探ると置いて、彼らの考え方を探るということをしてみただけです。

同じ環境のなかで異なる解釈を取ることは、拙著の第二章と第四章に最も明確な説明があります。ボリビアでは、一九八二年に軍事政権から民主主義体制に移りました。民政移管の選挙にあたり、ボリビアの高地先住民はこれを政権獲得の大きなチャンスであると考え、積極的に選挙に参加しました。ところが結果は惨敗であり、ほとんど議席は取れませんでした。さらに、一九八〇年代のボリビアは他のラテンアメリカ諸国と同様、対外債務危機にあり、返済のために政府の財政の規模をなるべく小さくする、いわゆる新自由主義政策を取っていました。国営企業



の労働者を何万人も解雇し、もと薄い市民に対する生活の保護をさらに削ることで、社会全体が非常に困窮しました。とりわけ、先住民の暮らしは厳しいものがさらに厳しくなりました。

民主化をしても、選挙によって政治的なパワーが得られるわけでもなければ、生活が良くなったわけでもない。この苦い経験を受けて、ボリビアの高地の先住民の一部はゲリラ活動に従事して、政権を武力で打倒しようとなりました。あるいは、先住民議会と呼ばれる自分たちのための議会を作って、既にある立法府を否定する動きを取ることもありました。

民主体制下における、こうした選挙によらない方法で政権を取る行動は一九九二年、ちょうどコロ



受賞記念講演

懸けてみようという考え方でした。失敗を踏まえて選挙の参加を再評価し、その後、選挙活動一本でポリビアの高地の先住民は政権獲得を試みるようになりました。

以上のポリビアの話は当然の展開であるようにみえますが、これが当たり前でないということは、エクアドルの事例を扱った第四章をみると分かります。

一九七九年に、エクアドルでは軍事政権から民主主義に変わりました。この時、エクアドルの高地先住民は民政移管選挙には参加しませんでした。理由は、そもそも選挙という制度自体が、これまで自分たちを差別してきた政治の支配者の道具に過ぎないものであり、それに参加する意味はないと考えたからです。合理的な選択者であれば、与えられた機会に飛びつくわけですが、彼らはそのようにしなかったということが、ポリビアとの大きな違いとして指摘できるわけです。その後、新自由主義が導入されて、エクアドルでも非常に生活が厳しくなると、民主主

義への不信が起こり、既存の議会を否定する目的で先住民議会を立ち上げる試みがなされました。そして、リーダー間の足並みの乱れから、その試みがうまくいかなかったという、やはりポリビア同様の経緯をたどることになりました。

失敗を受けて、活発な議論がリーダーの間で戦わされましたが、そのときに示された新しい方針に関する解釈は、ポリビアとは少し異なるものでした。今まで選挙は否定してきたけれども、民主化して時間がたっているから参加してもよいと考え始める一方で、支配者層有利の民主主義はそもそも信頼できない以上、それを否定する目的で試みた先住民議会の創設という従来の方針こそが、本来であれば一番正しいものである。だから、選挙にも参加するが、先住民議会という別の方式の政権を取るやり方も決して捨てないという、両方を同時に正当化するものでした。

一九九〇年の半ばに、エクアドルの先住民は政党を作って選挙で大成功を収めます。先住民政党がエクアドルの主要政党の仲間入りを果たしたことは、ラテンアメリカ

カ全体で大いに注目を受けました。ただ、それと同時に、ちょうど不況であった二〇〇〇年の時点で、先住民は軍と手を組んでクーデターも起こしています。自らの躍進を遂げた選挙の制度的基盤である民主主義を否定したことは非常に謎めいているのですが、これは、彼らの考え方からすれば当然といえます。もともとあった制度不信が残っていて、それを実現したものだということが、彼らの前歴をみれば分かるかと思えます。

このように、先住民は決して同質的な存在ではなくて、組織的なかかなり異なった考え方を持ったものだといえます。その個別具体的な彼らの考え方を押さええずして、彼らの行動を理解することはできないのではないかとというのが、私の結論です。

さて、残りの時間で、この本の内容を踏まえて、運動の境目というところに話を膨らませて考えていきたいと思えます。

今回、本を書くに当たって、多くの資料を読み、いろいろな方と話をしましたが、そのなかでよく出てきた非常に厳しい批判があります。先住民運動は反民主的だという考え方です。皆さまご存じの

とおり、民主主義は既に、実現すべき価値のある政治体制として世界的に広く正当性を認識されています。その一方で、先住民の運動は、差別を克服する目的のために、民主主義のルールに従わない行動を取ることもあります。そうなる先住民は、自分の利益のためにルールを守らない、民主主義に反するような人たちだという厳しい声が出てくることになります。確かに、その行動を選択したのは先住民自身ですから、ストレートに彼らの責任を問うという発想になるのは理解できるのですが、私はそのように考えるべきではないと思います。

その手掛かりになるのが、先ほど説明したエージェントという考え方です。あらためて、私の本にあります定義を確認します。社会的文化的に影響を受けながらも、言葉を用いて状況を解釈し、それに基づいて行動する人間がエージェントです。

民主主義に反する行動を取ったということの背景には、その行動を取った人の解釈があるのはいうまでもないことです。ただ、エージェントという概念は、過去からいろいろなもの人間が引き継い

でいるのだということを示しています。先住民に照らし合わせて考えれば、差別や民主主義への幻滅といった非常に苦い経験を引き継いでいますし、先住民のリーダーたちは、さまざまな本を読んで、世界中にある思想を積極的に取り込むこともしました。さらには、その経験や思想を踏まえて、組織のなかで議論を戦わせて、これから自分たちはどうしたらいいのかという意見を真剣につくり出してきました。

このように考えると、その行動を選んだ先住民本人の責任を問うことができると同時に、そのような解釈に至った背景まで深く理解しないと、その行動の評価はできないだろうということ、エージェントは示していると私は思います。

今回、私の本では、四〇年ぐらゐの先住民の歴史について調べました。昔の差別された人の記録はまとまった形ではほとんど残りませんので、過去の記録を集めるとなると、新聞を一枚一枚めくって、先住民の記事がどこかに載っていないかを探すところからスタートしなければいけませんでした。小さな囲み記事の形で残っている彼

らの行動や言葉を積み上げるうちに、私が非常に驚いたのは、先住民の活動家は非常に活発で、労働運動の人々や、与党・野党の政治家、さらには国外のNGOを通じて、オーストラリアなどで講演をして、自らの経験を広め、かつさまざまな人々の経験を共有していたことです。

今回、私の本に使った表紙もまた、先住民運動の広がりを示すものとしてみる事ができるかと思えます。これは先住民組織の総会の様子です。総会は最高の意思決定機関ですから、そこには当然、先住民の人がいるわけですが、なかには先住民ではない人も実はたくさんいます。アメリカ合衆国からをはじめとして、民族の平等を何とか実現したいと思ってエクアドルに駆けつけたボランティアや、民族の自決に強い関心を持つ国内外の研究者、日本の新聞記者もいます。この写真を撮った私も、先住民ではない日本の研究者です。

なかに入るには組織の許可を取らなければいけません。入ってしまえば、非常に活発な議論ができて、先住民でない人も話をすることができま。その熱気を帯びた議論に触れるたびに、先住民運動

の活発さを身に染みて感じるとともに、先住民の運動は先住民だけのものではなく、組織に限られない、横に広がった人のネットワークなのだとつくづく感じさせられました。

先ほどの行動の責任に話を戻せば、その行動を取った先住民自身の動きは誰がつくるかといえば、先住民本人であり、かつその周囲の人たちであるとまとめることができます。人間の行動を、民主主義や人権など、正義の観点に照らし合わせてその善悪を測ることは、当然簡単にできるわけですが、そのような行動を取るに至った経緯は、歴史を知り、人のつながりを知らなければ正しく理解できないでしょう。先住民運動の研究から私は、行動を分かった気になるなということをお教わつたように思います。

今後も私はラテンアメリカ政治の研究を続けていきますが、この教えを忘れないように研究に精進していきたいと考えています。以上で私の発表を終わりにします。ありがとうございます。

(みやち たかひろ／東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 准教授)